

授業科目名 (英文名)	専門基礎演習 (Second-year Seminar)	科目区分 対象学生	
単位数	4.0	開講年次・ 学期	2
担当教員	齋藤 翔太郎	所属	経済学部
オフィス・場所		連絡先	
講義目的及び到達目標	経済史についての基礎的な知識を幅広く習得すること。 「読む」・「話す」・「聞く」・「書く」の技術と作法、そして度胸を身に付け、さらに高めること。		
講義内容・授業計画	<p>経済史 (Economic History) とは、経済学の歴史ではなく、経済そのものの歴史のことである。例えば、どうして産業革命はイギリスで最初に発生したのか、といったことを考えるのが経済史という学問である。ただし、経済史の対象は非常に幅広い。産業革命のような経済現象だけではなく、物や人にもそれぞれの歴史がある以上、経済史の対象たり得る。イギリス料理はなぜまずいのか、も立派な経済史の問いである。その意味では、経済史という学問は明確な境界線を持たない、別の言い方をすれば、「なんでもあり」で、「なんでもできる」学問である。</p> <p>このように経済を歴史的な視点から考察することの優位性とは何だろうか。それは、まず経済社会の「起源 (origin)」を追究できること、さらに経済現象の「原理 (principle)」を体得できることである。つまり経済史を学ぶと、現在起こっている様々な出来事の「そもそも、どうして？」をより深く考えることができるようになる。「何が、どうして、どうなった」という過去から現在への流れがおぼろげに見えてくる。現在の「当たり前」が過去には全く「当たり前」ではなかったことに気づく。過去を知ることは現在を知ることであると同時に、現在を疑うことでもある。</p> <p>この演習では、まず経済史に関する入門的な文献を皆で輪読し、基礎的な知識を養う。その後で、共通のテーマを設定するので、各自あるいはグループごとに個別のテーマについて「研究」を進める。共通のテーマは教員が定めるが、個別のテーマは自分で選ぶことになる。それぞれ関心のあるテーマについて自分で調べ、自分で考え、自分で伝えること、それらがこの演習における「研究」の作業になる。どのような「研究」をするにせよ、自分の関心のあることをとことんまで突き詰めることの楽しさ (と難しさ) を実感してもらえればうれしい。</p> <p>ちなみに前年度の共通のテーマは「モノの経済史」であった。具体的なモノの歴史を手掛かりに、そのモノがいかなる時代状況のなかで発見・生産・流通・消費され、それが経済や生活をどのように変えたのかについて考えた。本年度の共通のテーマについては履修者の関心を踏まえて設定する予定である。</p>		
テキスト	授業のなかで適宜指示する。		
参考文献	授業のなかで適宜指示する。		
成績評価の基準・方法	報告、提出物、発言等により総合的に評価する。無断で欠席した場合には厳しく対処する。		
履修上の注意・履修要件	大人としての常識を持つように。学生だからといって子ども扱いはしないので、そのつもりで。		
実践的教育			
備考			